史料に見る近代女性日本画家
池上緑畝の活動

松　浦　千栄子

はじめに

池上緑畝は、明治末から昭和戦前期にかけて活動した女性日本画家である。荒木寛畝に師事し、いわゆる日本画の旧派系に属する画家であった。当時から、女性画家としてというより、日本画家・池上秀畝の、妻としてよく知られていた。今日作品もあまり残っておらず、詳細な画業については、不明な点が多い。

令和6（2024）年は、緑畝の夫、池上秀畝の生誕150年にあたる。筆者は池上秀畝の展覧会を準備する中で、緑畝について知るに至った。彼女は、結婚後も制作活動を継続しており、目覚ましい活躍とて無いものの、展覧会への出品を続けていた。当時、最も成功した日本画家の一人であった夫、池上秀畝の活躍を支えつつも、本人も画家としての活動を継続し、女子の教育にも携わるなど、精力的に活動していたことが伺える。本稿では、日本画家池上緑畝の活動を当時の雑誌記事などに追いながら、これまで顧みられることの無かった彼女の画家としての側面、画家の妻としての側面、その両面に光を当ててみたい。

第一章　日本画家　大岡・池上緑畝

池上緑畝、本名豊子、旧姓大岡豊子は、明治8（1975）年、12月15日山口県小串町（現在の山口県下関町豊浦町大字小串にあたる）に、医師の大岡尚斎の三女として生まれた。長兄には、衆議院議長で弁護士の大岡育造[1]がいる。歳の離れた兄を頼って上京したのだろうか、詳細は伝わっていないが、早くから上京し、

[1] 安政3（1856）－昭和3（1928）、弁護士、政治家。衆議院議長や文部大臣などを歴任。

共立女子職業学校造花科を卒業した。学校入学以前に、荒木寛畝[2]の画塾に入塾、南北号派を学んだ。寛畝塾内では、かなり初期に入門した弟子だったようで、寛畝の養嗣子となる荒木十畝（1874-1944）の回顧録には、「（十畝入門当時）その頃女の弟子が三人居た池上秀畝の夫人緑畝さんもその一人である」[3]と記載がある。荒木寛畝に最初に入門したのは、のちに緑畝の夫となる池上秀畝で、小学校を卒業した年の明治22（1889）年10月に寛畝の内弟子となっている。荒木寛畝はこの翌年、明治23（1890）年の第3回内国勧業博覧会で妙技二等賞を受賞し、世に知られる存在となった。十畝の記述は明治26（1893）年頃のことで、寛畝が弟子をとり始めてから2、3年のうちには、緑畝も入門していたことになる。十畝が入門した当時、一番弟子であった秀畝は、住み込んでいた師の家を出て、郷里の長野県高遠町と東京を行き来する生活をしており、十畝とはあまり顔を合わせることは無かったようだが、緑畝は秀畝が内弟子時代に既に入門しており、顔を合わせることも多かったろう。

緑畝の展覧会への初出品は、明治34（1901）年11月に上野公園旧博覧会跡五号館にて開催された日本女子美術協会第1回展である。女子美術協会は、前年に「女性的美術工芸の発達を図るの目的を持って」[4]設立されたばかりであった。

緑畝は、本名の「大岡豊子」の名で《旭日松》を出品、入選している[5]。印刷が黒ずみ判然としない部分もあるが、縦長の画面に稚松と日の丸、稚松の下部に鳥と花のような植物が描かれている。翌明治35（1902）年10月開催の第2回展には「大岡豊」の名で、鶏頭や芒を描いた《秋草》という作品を出品している。

次に緑畝の作品を確認できるのは、明治37（1904）年開催の日本画会第6回展に出品された《夏のゆふべ》である。ここでは、「大岡緑畝」の名で出品され

---

[2] 天保2（1831）－大正4（1915）、幕末から明治にかけて活躍した、絵師、日本画家。女子高等師範学校、華族女学校などで講義を受け持ち、橋本雅邦の死後は、東京美術学校でも教鞭をとる。明治33（1900）年帝室技芸員に任命。

[3] 『芸天』14号、大正13（1924）年2月

[4] 『女学講義』第四回前期第1巻、大日本女学会、明治34年（1901）11月掲載の記事「日本女子美術協会の設立」

[5] 島田友春編『女子美術協会かたろぐ』巻1、画報社、明治35（1902）年

ており、「緑畝」の号は、明治 36、7（1903、4）年ごろから使用し始めたことがわかる。本作品は、当時最も活躍していた女性日本画家である野口小蘋の作品と共に、皇后宮に御用品として買い上げられた[6]。あるいはこの辺りが緑畝の画家としての絶頂期であったと言えようか。

翌明治 38（1905）年、日本画会第 8 回展には《藤下双鶏》を出品している。藤の花が垂れ下がる下に、色の違う鶏が二羽、水辺に配される。また同年から始まった荒木寛畝塾の展覧会、読画会第一回展に《清涼》を出品している。瀧の流れを背景に、紅葉と鶺鴒を配した作品で「白簾直下、青楓更に涼を加え、鶺鴒に寂莫の境を想わしむ。」と『美術画報』[7] で紹介された。この年の秋、緑畝は、同門の先輩である池上秀畝と結婚し、「大岡」姓から「池上」姓となった。翌年の明治 39（1906）年日本画会第 9 回展では、「池上緑畝」の名で《長閑》という作品を出品している。水辺の草木に止まる小鳥の姿が描かれる。

雑誌の記事などから確認できた緑畝の展覧会出品歴をまとめると、以下のようになる。

緑畝出品歴

明治 34（1901）年　日本女子美術協会第 1 回展　大岡豊子《旭日松》

明治 35（1902）年　日本女子美術協会第 2 回展　大岡豊　《秋草》

明治 37（1904）年　日本画会第 6 回展　大岡緑畝《夏のゆふべ》[8] 皇后宮買上

明治 38（1905）年　日本画会第 8 回展　大岡緑畝《藤下双鶏》

明治 38（1905）年　読画会第 1 回展　大岡緑畝《清涼》

明治 39（1906）年　日本画会第 9 回展　池上緑畝《長閑》

明治 40（1907）年　日本画会第 12 回展　池上緑畝《晩涼》

明治 43（1910）年　東西諸大家新作画幅展覧会（三越）

6　日本画会編『当選画集』第 6 回、画報社、明治 37（1904）年

7　『美術画報』第 18 編巻之 6、画報社、明治 38（1905）年 12 月

8　《夏のゆふべ》は、第 6 回展の出品作と考えられるが、日本画家第 7 回の『当選画集』（明治 37（1904）年）にも見られるが、作品は掲載されていない。

昭和8（1933）年　日本美術協会第92回展　池上緑畝《孔雀》 褒状
昭和10（1935）年　日本美術協会第99回展　池上緑畝《白孔雀》 三等賞銅碑
昭和16（1941）年　伝神洞塾将士慰安献納画展　池上緑畝

明治40年の日本画会第12回展以降、昭和8年の日本美術協会展まで、23年もの間展覧会での入選が途絶えている。単に落選続きだった可能性もあるが、番付にはしばしば名前が登場し、世間的には知られた画家だったことが分かる。大正5（1916）年の『帝國絵画番附』[9]では、東京の部の「優秀画家」第一段のところに「池上緑畝」が記載されている。大正12（1923）年の『古今大番付七十余類』[10]では、「大正画家番附」の女性画家を集めたところに、東の前頭筆頭として「池上緑畝」の名を確認できる。ちなみに横綱は上村松園である。西の前頭筆頭が島成園であることを考えると、いささか過大評価な気もするが、それだけ緑畝の世間的な評価が高かったことを物語っているとも言えるだろう。

『増補古今書画名家一覧』[11]では、昭和元年（1926）年、翌昭和2（1927）年の「現代閨秀各派名家」の項に「池上緑畝」の名が見られた。また昭和12（1937）年の『改訂古今書画名家一覧表』[12]にも、緑畝の名を確認することができる。

また各種画人伝などに「池上緑畝」として掲載されている。大正元年発行の『帝国絵画名鑑現代之部』が、確認できた中では最も早い例である。署名・落款とともに紹介されており、ここでの記載が比較的詳細であるので以下に紹介する。

緑畝　池上豊子

明治八年一二月十五日山口県小串町に生る、荒木寛畝に師事して南北合派を修め、明治三十一年三月共立女子職業学校造花科を卒業す、明治三十四年及び同三十五年女子美術協会に於て褒状二回を得、同三十七年以降日本画会に出品

[9] 『大正五年度現代日本画帝国絵画番附』大正5（1916）、帝国絵画協会
[10] 東京番附調査会編『古今大番附七十余類』文山館書店、大正12（1921）年
[11] 石塚猪男蔵編『増補古今書画名家一覧』石塚猪男蔵、昭和元（1926）年
[12] 東楓荘散人編『改訂古今書画名家一覧表』益井文英堂、昭和12（1937）年

して当選すること五回、明治三十六年より日本美術協会に出品して褒状を受くること三回、明治三十七年日本画会に於て皇后職御用品の恩命を蒙る、帝国絵画協会及び読画会の会員にして、現に東京市下谷区谷中清水町十二番地に住す。

この他にも『日本美術年鑑』（画報社、大正 2（1913）年）、『現代日本美術画家全録』（画報社、大正 3（1914）年）、『明治画史大正画家列伝』（文陽堂、大正 2（1913）年）、『大正現代日本画伯小伝』（日本画堂、大正 5（1916）年）、『古今日本画名家辞典一』（石塚松雲堂、昭和 2（1927）年）、『古今書画便覧』（松雲堂、昭和 4（1929）年）などに「池上緑畝」の名を確認できた。生年が明治 8 年、明治 7 年、明治 28 年など、ややばらつきがあるが、明治 8 年の間違いと見てよい。

緑畝の展覧会への出品が確認できない大正期は、夫である池上秀畝が文展、帝展で受賞を重ね、画壇での地位を確立していく時期で内弟子をとりはじめた頃でもある。この時期の緑畝の活動は、自身の作画活動よりも、日本画家の夫・池上秀畝の活躍を支える妻としての役割が生活の中心であったと考えられる。次章では、妻としての緑畝について見ていくこととする。

第二章　池上秀畝夫人　池上緑畝

緑畝に限らず、この時代の女性画家たちの中には、夫も画家である場合が少なくない。同時代でよく知られたところでは池田輝方・焦園夫妻、松林桂月・雪貞夫妻などがある。緑畝も、明治 38（1905）年 30 歳の時、荒木寛畝の同門で、先輩だった日本画家・池上秀畝（本名：池上国三郎）と結婚した。当時としては遅めの結婚であっただろう。荒木寛畝の門下で日本画を学び、官展での活躍こそないものの、展覧会でも度々入選を重ねて当時の画家番付にも登場する緑畝が、画家として生活していくことも考えていたのだろう。昭和 9（1934）年発行の『日本婦人の鑑』「池上豊子」には、「偶ま三十歳の時、女子英学界の泰斗津田梅子女子の勧説に接し、年来の独身生活を精算して秀畝画伯に嫁す」とある。「津田梅子女子の勧説」が、実際にどのようなものなのかは不明だが、津田梅子が恋愛結婚を理想とし、知らない者同士が結婚する日本のお見合い結婚に否定的な考えで

あったことが知られているため[13]、緑畝が接した勧説というのも、これに近い内容のものだったと考えられる。そして、ここからは想像でしかないが、当時すでに同門の画家同士、池上秀畝と親しい仲になっていたか、或いは緑畝の方が秀畝に対して好ましい感情を持っており、津田梅子の勧めがきっかけとなって結婚するに至ったということだろうか。いずれにせよ、結婚後、秀畝が画家として大成し、画壇での地位を確立していったことで、緑畝は世間に「池上秀畝夫人」としてよく知られていくようになる。

大正5（1916）年の『絵画清談』[14]では、巻頭の記事として夫婦写真付きで登場、それぞれ略歴が紹介されている（図1）。

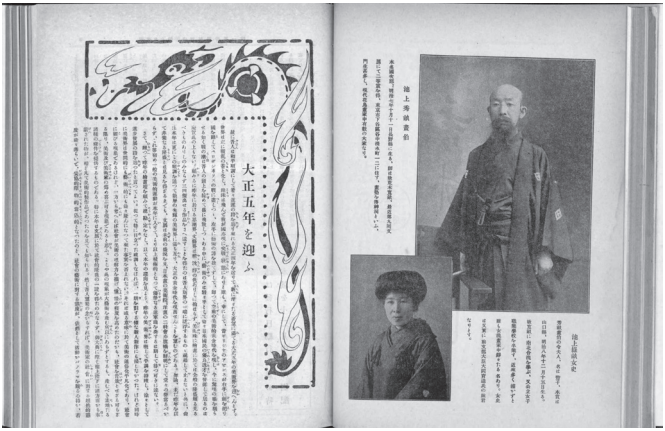

図1　『絵画清談』4（1），［絵画清談社］, 東京美術館 ,1916-01. 国立国会図書館デジタルコレクション

「近来多く描かずと雖も女流画家中錚々たる名あり」と紹介されている。やはりこの時期、あまり作品制作を行っていなかったようである。大正4（1915）年には、二人の師である荒木寛畝が亡くなり、寛畝門下は寛畝の娘婿である十畝の

[13] ママトクロヴァ　ニルファル「津田梅子の日本女性像―女子英学塾創設の背景をめぐる検証―」『アジア教育史研究』30巻、アジア教育史学会、2021年、31頁
[14]『絵画清談』第4巻第1号、絵画清談社、大正5（1916）年1月

読画塾と、池上秀畝の伝神洞の大きく二つの系統に分かれていく。大正期は夫の出世と共通の師の死没によって、夫の画塾の切り盛りなど、画家の夫人として忙しく働いた時期と重なるのだろう。

緑畝が画家の妻であることを伝える興味深い記事が、大正 13（1924）年の『芸天』[15]（図 2）に掲載されている。「画家の妻は斯うも苦労だ－池上秀畝氏夫人緑畝さんは語る－」と題された記事には、第一線で活躍する画家の妻ならではの苦労が語られている。以下に緑畝の記事を部分的に紹介する。

美術界の婦人圏　画家の妻は斯うも苦労だ－池上秀畝氏夫人緑畝さんは語る－

画家の妻として、どなたも同じ苦労の種は、文展から帝展へかけての出品制作が、どんな結果になるかと云うことでしょう。池上は幸いにも文展二回の最初の出品から、一度も落選しませんが、入選してもその作の世評の悪い時……それこそ私は夜の眼も合わぬ程、その批評を苦にしたものです。池上にはそうしたことには余り気を遣わぬと見えて、よく眠るのですもの、私は時々ひとの気も知らはいで……と腹の立つこともありました。しかし、おかげで推薦になってからは一と安心です。よく他家の奥さん方が、御主人の出品が無事に入選するようと、お百度を踏んだり、又は出品画の材料を買う為めに、髪の飾りを売ったりして御主人の為めにお尽なさる。と、云うようなことを伺いますと、涙を流さずには居られません。私はそうした苦労はしなくとも画家の妻として御主人に尽される、奥さん方のお心持は、よく解ります。

（中略）

現代の若い方々や、新しい画家の方達は、沢山書くな濫作をするな、一ヶ月に四五枚か一年に二三枚でも、芸術的欲求から出た作をすればいいと、高唱されるようですが、私の考えでは、それは万人の中の選ばれた一人の仕事でしょう、と存じます。何故ならば、描いて居る中に悟る処があり、筆の味

[15]『芸天』創刊号、芸天社、大正 13（1924）年 4 月

も練習を積んでこそ出るものではないでしょうか、第一経済の点からしましてもね……。

（中略）

池上は依頼されると、それを断ることの出来ない性質ですから、何時になったら私の希望通りになることか、見当はつきませんが、それでも此頃は幾分か私の心持になって紙本などに会心の作を描きはじめましたが、未だ未だ池上として、後世に遺す作には、手がつきません。ご承知の通り、私の家庭には子供がありませんから、池上の名を遺すには制作の外はありません。私は池上が後世に遺す制作をする為めには、わずかばかりの資産でも、それを全部費してもいいと思います。

（中略）子供のない私達夫婦は子供の代りに池上その人を語る名作が一つや二つは此の十年間に出来るでしょう。いいえ、私はきっとそうさせます

美術界の婦人部

畫家の妻は斯うも苦勞だ
——池上秀畝氏夫人鉄枝さんに語る——

人氏秋鉄夫池

物故美術記者追憶
坂井犀水

藝天主催
物故美術記者追悼會
時　日＝四月四日午後二時より
會場＝上野東京美術學校内文庫階上
御來賓歌塊、會費金三圓五十錢

— 17 —　— 16 —

図２　『芸天』(1), 芸天社 , 1924-04. 国立国会図書館デジタルコレクション

画家の妻として、特に官展に入選するかどうかの心配、入選しても世評がどうか、心配事は尽きず夜も眠れぬ日々を送ることがあるという。言葉通り「画家の妻」としての苦労が語られている。また、若い画家や同時代の画家達の「沢山描くな濫作をするな」という、作品制作を絞りこむという態度に対して、「描いて

居る中に悟る処があり、筆の味も練習を積んでこそ出るもの」という言葉には、自身も画家という立場ならではの意見と言えるだろう。この「美術界の夫人圏」という特集では、他に鏑木清方夫人照子と、彫刻家藤井浩裕夫人竹尾の二人が紹介されているが、自身も画家という立場なのは緑畝だけであり、他の二人が夫の制作などに対しては多くを語らないのに対し、緑畝の決意の並々ならぬ様子が印象的である。特に最後の「池上その人を語る名作が（中略）出来るでしょう。いいえ、私はきっとそうさせます」という、強い言葉で締め括られるところに、緑畝の決意が現れている。この記事の時すでに秀畝は、文展、帝展で特選を重ね、おそらく世間的に最も成功した画家の一人であったと考えられるが、緑畝としては、「未だ未だ池上として、後世に立派に遺す作には、手がつきません」と厳しい評価であった。多作で展覧会には複数の作品を出品することが珍しくなく、依頼画も多くこなしていた夫の秀畝だが、同じく画家として活動した妻の目には、更なる高みに到達できると映ったのだろうか。

第三章　職業としての「閨秀画家」

近世以前にも、活躍した女性の画家は少なからずいたが、女子教育が整備され、各種学校が設立される明治以降、その数は飛躍的に増えていったと考えられる。それ以前から画塾が中心だった日本画は、女性の嫁入り前の習い事として、学びやすい環境にあった。加えてこの時期、良妻賢母としてではなく、女性の社会的自立を目的とした学校が誕生してくる。緑畝も卒業生に名を連ねる共立女子職業学校や、女子美術学校などが開校し、それらの学校を卒業した女性達の職業選択の一つとして、「閨秀画家」が挙げられるようになってくる。明治 39（1906）年刊行の『女子職業案内』[16] には「小学校教員」や「保母」などと並んで、「閨秀画家」が挙がっていることはとても興味深い。

また、大正 6（1917）年には『自活の出来る女子の職業』[17] なる本が出版されて

[16] 近藤正一著『女子職業案内』博文館、明治 39（1906）年、136 頁
[17] 春陽著『自活の出来る女子の職業』洋光堂出版部、大正 6（1917）年、12 ～ 17 頁

おり、その中に「閨秀画家」の項目が見られる。学ぶ環境が出来たからといって、突然「閨秀画家」として食べていけるようになるとはとても思えないが、女子の職業の選択肢が、家庭の主婦や母ではないものにも広がった一つの象徴とでも言えるだろうか。本書によれば、美は「男子よりも遙かに性格に適応して居るのと指先の器用なのとは女子にとって実に好個の天職とも云いつべきものであろう。」[18]という。画塾でも学校でも、「真面目に熱心に修行して相当の腕前になれば」[19]高額な報酬を得るのも夢でないないというわけである。もっと現実的なところでは、新聞や雑誌の挿絵、呉服店の図案専門の画家として働く道もあると説かれている。

緑畝が最初に作品を発表した日本女子美術協会は、女子美術学校（現女子美術大学）の教員を中心として明治34（1901）年、主に学生たちの成果発表の場となることを目的として設立された。『女学講義』[20]に日本女子美術協会について伝える記事が掲載されている。それによれば、「今回広く日本全国の女子美術家及び美術工芸家の制作品を収集陳列して、女性的美術工芸の発達を図るの目的」で、「遍く全国の女子美術家を網羅することとなりたり」と伝えている。

江戸時代生まれの文人画家、奥原晴湖[21]や野口小蘋[22]の活躍に続いて、明治生まれの上村松園[23]の登場、さらに続いて池田焦園[24]や伊藤小波[25]など、活躍する女性画家たちが増え、女性画家は美術雑誌や婦人雑誌など、さまざまなところで紹介されるようになった。大正5（1916）年の雑誌『世の中』[26]では、「三都女流画

---

[18] 註16前傾書、13頁
[19] 註16前傾書、16頁
[20] 大日本女学会、第四回前期第壱巻
[21] 天保8（1837）－大正2（1913）、幕末から明治にかけて活躍した南画家。野口小蘋とともに、明治の女流南画家の双璧と言われた
[22] 弘化4（1847）－大正6（1917）、明治から大正期にかけて活躍した南画家。明治37（1904）年、女性として初めて帝室技芸員に任命された
[23] 明治8（1875）－昭和24（1949）、京都を拠点に活躍した日本画家、美人画を得意とした。昭和23（1948）年に女性として初めての文化勲章を受賞。
[24] 明治19（1886）－大正6（1917）、明治から大正にかけての日本画家。夫は日本画家の池田輝方（明治16（1883）－大正10（1921））
[25] 明治10（1877）－昭和43（1968）、日本画家、風俗画や美人画を得意とした。
[26] 兎川松峰「三都女流画家の作風と生活」『世の中』第2巻第7号、実業之世界社、大正5（1916）年6月、頁137

家の作風と生活」と題して、野口小蘋、池田焦園、島成園[27]などが紹介されている。その冒頭で「女流画家は全国に六七百人」とあり、その数はあくまで予想であるが、東京、京都、大阪の三都を調べると「三百七十何人かあった」とあり、中でも世間で認められ、画によって生計を立てている画家たちを紹介している。各画家の作品の値段の相場を示し、月収の大凡を算定している。

こうしたある種物珍しいものとして紹介されるようになると、それに対する批判的な記事も登場する。大正6（1917）年の『美術』[28]に掲載された「現代婦人画家の群に寄す」などはその一例である。女性画家が増加していることに対し、「無闇と」「生産され」ているとし、「現代の女流画家なる人達を殆ど頭を使用せずに生活している人だと見ても差し支え無い」と批判している。具体的な画家の名前は登場しないが、女性画家を指導する画家から聞いた話として、ある閨秀画家が「粉本、古本、錦絵、浮世画様々」と絵葉書などを集めて構想した下図を、師のところへ持っていくと、師によって加筆、清書されたものを与えられ、閨秀画家はそれを「寸分の相違」なく写して作品とし、仕上げにも師が手を入れ、師に八分まで描かれた作品が文展に出品され、作品は入選したという。入選したことでこの閨秀画家は著名になり、画塾を開いて弟子を取るようになる。これにより益々、頭を使わない女性画家たちが増えていくことを危惧していると書かれている。官展の入選作でこうしたことが起こっていたかは少し疑問だが、世の中に注目される中で様々な批判にさらされたであろう。

まとめ

日本画家池上秀畝の妻で、自身も日本画家として活動した池上緑畝について、主に雑誌の記事などの史料から見てきた。現存する作品も少なく、その名を知る人ももはや少ないが、寛畝に学んだ花鳥画に忠実に、堅実な作品を制作したこと

---

[27] 明治25（1892）－昭和45（1970）、大阪生まれ、大正から昭和初期にかけて活躍した日本画家。京都の上村松園、東京の池田焦園とともに、三都三園と並び称された。

[28] 富本一枝「現代婦人画家の群れに寄す」『美術』第1巻第4号、大正6（1917）年2月、七面社、170頁

が、雑誌に掲載された作品などから想像できる。夫の池上秀畝は、第二世界大戦の終結する前年の1944年に没した。緑畝は、昭和37（1962）年87歳で亡くなる。秀畝没後の出品歴などはなく、人物辞典などでも没年不詳となっていることがほとんどである。今回調査した資料のいくつかは、夫で日本画家の池上秀畝を調査する過程で得られたものである。緑畝については史料が少なく分からないことも多いが、門下生の多かった夫を支え献身的に画塾を切り盛りした姿が垣間見えたように思う。今後も継続して調査して行きたい。

池上緑畝年譜[29]

明治8（1875）年12月	15日医師大岡尚斎の娘・として、山口県小串町に生まれる。本名・豊子。長兄に弁護士で政治家、衆議院議長を務めた大岡育三がいる。[30]
年不詳	山口女子専修学校卒業[31]
明治26（1893）年	この頃すでに荒木寛大畝に入門か[32]。
明治31（1898）年3月	共立女子職業学校造花科卒業
明治34（1901）年11月	日本女子美術協会第1回展覧会に「旭日松」出品[33]
明治35（1902）年11月	日本女子美術協会第2回展覧会に「秋草」出品
明治37（1904）年	日本画会第6回展に《夏のゆふべ》入選、皇后宮亮臨

[29] 池上緑畝の生年、経歴については『古今日本画名家辞典一』石塚松雲堂、昭和二（一九二七）年、『帝国絵画名鑑　現代之部』帝国絵画協会、大正元（一九一二）年などを参照した。

[30] 緑畝の兄弟構成については、池上秀畝の息子・秀一氏が昭和六三年に作成した家系図を参照した。家系図については、信州高遠美術館学芸員の小松由衣氏にご教示いただいた。

[31] 婦人評論社編『日本婦人の鑑』婦人評論社、昭和9（1934）年、「池上豊子」の項。

[32] 緑畝の荒木寛畝塾への入門時期は定かで無いが、『芸天』一四号（大正一三（一九二四）年2月）に掲載の荒木十畝の自身の回顧録中に「その頃女の弟子が三人居た池上秀畝の夫人緑畝さんもその一人である」とあり、十畝が寛畝の内弟子となったのが明治二六（一八九三）年ごろであるため、この頃には既に寛畝塾の門下生であったと推測される（前掲書、注3）。また、『福士博士還暦祝賀記念誌』（昭和一七（一九四二）年、福士博士還暦記念会出版部）には、「早くより東京に出て、はじめ跡見玉枝画伯に就き日本画を修められ、次いで荒木寛畝画伯に就き研鑽せらる」とある。

[33] 『帝国絵画名鑑』には、「明治三四年及び同三五年女子美術協会に於て褒状二回を得」とあるが、史料は確認できなかった。

	場あり、御用品買上となる。
明治 38（1905）年 11 月	同門の日本画家池上秀畝（本名・国三郎）と結婚。日本橋区薬研堀 30 番地に住む。後に下谷区谷中清水町に転居
明治 39（1906）年 6 月	日本画会第九回展に《長閑》入選[34]
明治 42（1909）年 6 月	日本画会第一二回展に《晩涼》入選[35]
昭和 8（1933）年 10 月	日本美術協会第 92 回展に《孔雀》褒状受賞
昭和 10（1935）年 10 月	日本美術協会第 99 回展　池上緑畝《白孔雀》 三等賞銅碑
昭和 16（1941）年	伝神洞塾将士慰安献納画展　池上緑畝《白鷺》
昭和 37（1962）	死去

謝辞

本稿執筆にあたっては、長野県伊那文化会館学芸員　木内真由美氏より、多数の史料を示唆していただいた。また、練馬区立美術館学芸員　加藤陽介氏にもご協力いただいた。ご協力、ご助言いただきましたこと、心より感謝申し上げます。

※雑誌記事の文字起こしにあたっては、旧漢字、旧仮名遣いは、新字体に改めました。

[34] 画報社『当選百画』第九回展、明治三九（一九〇六）年 7 月より
[35] 日本画会編『当選画集』第一二回、明治四二（一九〇九）年 8 月より